

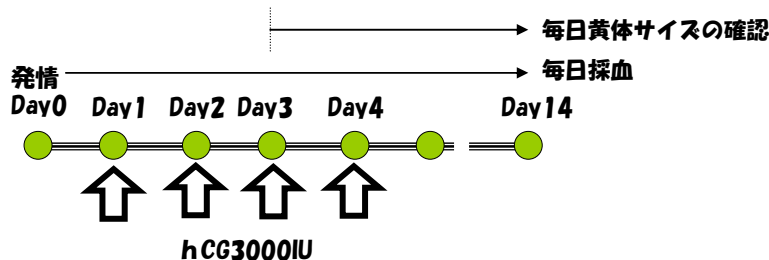
hCG投与のタイミングが黄体サイズおよび 血中プロゲステロン濃度に及ぼす影響は？

これまでにAI、ETで、hCGを投与することにより受胎率が向上する、あるいは受胎率に効果がないといった論文が多々報告されています。一般的にAI後5日目（第一卵胞波の主席卵胞が発育した時点）にhCGを投与することで、副黄体の形成を促し受胎率向上させようといった試みがよく報告されています。

今年の国際胚移植学会で発情後早期のhCG投与により黄体サイズおよび血中プロゲステロン濃度がどういった動態を示すのか報告したものがありませんのでご紹介いたします。

材料と方法

交雑種肉用未経産牛50頭を供試し（10頭/1試験区）、
対照区として発情後1日目に生理食塩水を投与。
試験区として発情後1, 2, 3, 4日目いずれかでhCG3000IUを投与。
Day0（発情日）からDay14まで毎日採血を行い、
後日血中プロゲステロン濃度の測定を実施した。
Day3からDay14まで毎日黄体サイズを超音波を用いて確認した。



結果を下表に

表1. hCG投与のタイミングがその後の黄体サイズおよび血中プロゲステロン濃度に及ぼす影響

		黄体サイズ	血中プロゲステロン濃度
Day1	hCG	変化なし	変化なし
Day2	hCG	Day6-12で有意に増大	Day6-11で有意に上昇
Day3	hCG	Day9-11で有意に増大	変化なし
Day4	hCG	Day9, 10で有意に増大	Day8-13で有意に上昇

V.Maillou ら（2013）Reprod. Fertil. Dev.

この報告では発情後2日目にhCG3000IUを投与することで、早期に黄体サイズの増大と血中プロゲステロンの有意な上昇が認められています。この方法をETに応用した場合、移植の時点で、より受胎しやすい子宮内環境を整えることが出来るかもしれません。

ET研究所ニュース

2013年 4月号



hCGの反復投与はアレルギーを引き起こすこともありますので、注意してください。

ET研究所本場のある北海道でもずいぶん暖かくなってきました。

これから蹄病や乳房炎が多くなってくることも予想されます。

酪農家さんは泌乳最適期である春をうまく迎えるために今のうちに牛舎の消毒など取り組んでいただければと思います。

文責；全農ET研究所 中村